「障害」のない会社でありたい

―立積（りゅうせき）住備工業株式会社―

職場ルポ

立積住備工業株式会社
〒630-8555　奈良県奈良市三条大路4-1-1
TEL　0742-33-3445　FAX　0742-33-3446

（文）清原れい子（写真）小山博孝

ユニットバスの組立加工

「奈良に障害者が急増している企業がありますよ」――今年4月に障害者の就労と自立支援を目的に「サポート21・なら」を立ち上げた馬郡繁（まごおりしげる）さん（元シャープ特選工業社長）から、こんな情報をいただいて、その職場を訪れた。

奈良の平城宮跡・朱雀門の隣に、積水化学工業の100％子会社「立積住備工業株式会社」がある。設立は1975（昭和50）年で、セキスイブランドのユニットバスの部品を製造する。社員89人のうち、障害者が21人働いている。

ユニットバスはパーツを工場で生産して、組立は建築現場で行う。工場ではパーツの成型までを機械で、その後は人の手で加工する。このFRP（繊維強化プラスチック）組立加工の現場を中心に、製造現場では障害のある人たち17人が、排水口の穴をあける、洗い場の床裏に部品を取り付ける、天井パネルにはめるふたにパッキンをつける、水滴にならないような親水剤を吹き付ける、カウンターやエプロンなど浴槽の小物を加工・梱包するなど、4グループに分かれて作業している。

滝本裕プレス製造部長

プレス製造部長の滝本裕さんは、プレス成型と組立加工の2つの部門の責任者だ。

「作業は間違いないですね。オーダーに基づいて生産していますが、欠勤が少なく、残業・休日出勤にも柔軟に対応してくれるので、生産量が変わっても対応力が高いです。その日に生産する数を見て、今日は残業などの判断をし、対応してくれます」

12月～2月、7月～8月が繁忙期だそうだ。

「仕事量は立ち上げたときの3倍に近づきました。将来性もあり、FRPの組立加工でやっていけるという実感が社内にいきわたってきたと思います。プレス部門の人たちも、私がこの職場の様子を話すので、自分たちの次の工程を行う人たちに関心を持ってくれています。これからは作業環境の整備と作業効率のアップを考えていきたいと思います」

滝本さんは、組立工程で働く人たちを「障害者」とは意識していない。

「普通の社員と同じです。すでにほかの人の面倒をみてもらったりしていますが、後輩が入ってきたら指導できる体制にしていきたい。年2回ほどの飲み会は、それは元気でにぎやかで、もめごともなく楽しんでいますよ。普通の職場と変わらないと思います」

多くの障害者がユニットバスの組立加工部門で活躍している

半年で不良品ほぼなし

FRP部品の組立加工は、以前は外注に出していた。高性能な設備と難しい技

術で生産する成型は自社で、成型後の技術をあまり必要としない加工、梱包、出荷は外注でという区分けをしていた。取締役管理部長の森安英憲さんは、その加工の仕事を自社でできないかと考えた。

「お客さんのニーズが多様化して、一つひとつオーダーメードに対応しなければならなくなり、製品の加工に付加価値がつく時代になってきました。細かいニーズに対応するには、機械化は難しい。人の手が一番柔軟です。ちょうど製品のモデルチェンジがあったので、新製品の加工は自社でやりたいと思いました。中心的な職場で障害のある人たちの雇用を広げたかったのです」

こうして、2010（平成22）年12月、新たな工程が立ち上がった。森安さんは雇用した責任上、進行状況が心配だった。

「立上げは順調といいたいのですが、はたから見るととんでもない立上がりだったと思います。『障害者にチャンスをください』とは話しましたが、新しい職場の大半を知的障害者で立ち上げようというのですから、社内でも相当な不安はあったと思います。でも、滝本部長は一言も文句をいわずに、森安が選んだ人間でやるという感じで、立上げにも日夜協力して、軌道に乗せてくれました」

森安英憲取締役管理部長

2011年4月、FRP部品の組立加工の工程は本格的に操業を始めた。

「東日本大震災の直後で、生産量が減っていました。その期間を活用して作業手順を丁寧に教えることができましたが、1カ月半ぐらいで軌道に乗り、私もびっくりしました。立上げから半年ぐらいで、基本どおりの仕事ができ、不良品もきわめて少ない職場になりました。作業手順を守り続ける、基準書どおりに作り続ける、その能力はすばらしいと思います」

一から立ち上げた滝本さんが、操業開始後の1年半を振り返る。

「この職場を短期間で立ち上げられてよかったと思っています。私も初めての作業だったので、みんな同じタイミングでのスタートでした。手作りで手順書を作り上げてきたので、一緒にやってきたという感じです。作業は『主』と『副』でペアを組んでいますが、一人ひとりの個性が強いので、ペアの組合せには配慮していています。だいたいうまくいっていると思いますね」

新入社員の岡崎美紀さん（右）と、指導にあたる渡部美和さん。ゴムパッキンの取付け作業をする

仕事は、製造の先輩社員、作業長、生産技術スタッフ、部長の滝本さんが教える。滝本さんは、一人ひとりの個性を伸ばすことに注力している。

「障害のあるなしに関係なく、相手のレベルはいろいろですから、その人に応じて教えるのは当たり前のことだと思います。現場では、作業が早く進んでいる、遅れているとか、このペースで進めるというペースメーカーの人間が必要なのです。いま、その役目を果たしており、段取りもできる人に障害があるということですが、私には障害があるとは思えません。もう1人、第2のペースメーカーになりつつある人は、障害者職業センター

で重度障害の判定を受けたそうですが、しっかり仕事をしています。もちろん当時とは変わったと思いますが」

養護学校生との出会いから

そもそも、立積住備工業が知的障害者の雇用を始めたのは、森安さんが地元の養護学校の先生に「職場実習」を頼まれて、2007年6月に学校を訪れたことからだった。

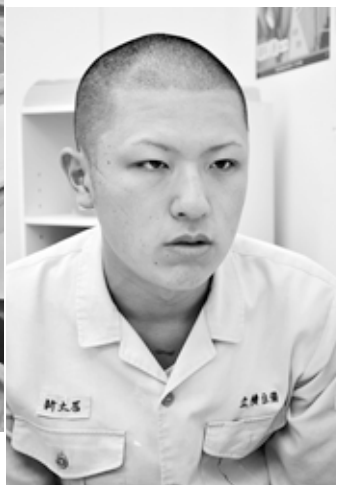
「養護学校へ行って、『こういう生徒たちと出会ったので、ぜひ職場実習をやりたい』と幹部会で提案しましたが、最初は無関心でした。知的障害者に会ったこともないので、想像がつかなかったのだと思います。先代社長は『危ない』と危惧しました。それから何回か話をして、『実習のときは社長を除く7人の幹部が当番を決めて、誰かが常に見守りにつく。工具は使わせない』という条件で、最初の実習が許可されました」

その雰囲気を変えたのが、初めて職場実習にきた高等部2年生の新土居（にいどい）将義（まさよし）さんだ。新土居さんはプレス作業を行い、検査工程までこなした。その仕事ぶりを見て、幹部の風向きが少し変わった。

「プレスの作業を立派にこなして、検査では『基準に合っていないから修正品』ときちんと仕分けしているのを、見守りについていた幹部たちが見て、認めてくれたのです。想像とずいぶん違うと印象づけることができました」

森安さんは経理を主に、総務人事も担当している。それまで障害者とは無縁の世界に生きてきた。

「養護学校での出会いが私を変え、この生徒たちのために何かしたいと思いました。私は入社後経理畑で数字の分析などをしてきて、いまも主担当は経理です。新土居君の実習がうまくいったので、次の実習はどんな生徒が来るのか楽しみにしてくれる雰囲気が職場にはありました。そうはいっても、私自身が何もわかっていなかったので、1年間は雇用せずに、養護学校で彼らと付き合ってから採用しようと決めました。障害者といわれる人たちを『人』として知りたかったのです。箕輪優子さん（今年度から本誌編集委員）の著書『チャレンジする心』からも勇気をもらいました」



ラインカウンターの穴あけ、ネジの取付け、みがき……と次々に作業をする新土居将義さん

その7カ月後、ある職場で欠員が生じた。ハローワークや派遣会社で募集をしてもなかなか人が集まらない。そこで幹部会で、「障害者を雇用させてください」と話し、2008年2月に1人の女性を雇用。知的障害者の雇用第1号となった。この彼女の働きぶりから障害者の雇用が拡大してきた。いま障害のある社員の半数はローテーション勤務やパートタイムで働く。

「福祉施設や作業所と、企業では働く厳しさが違いますから、垣根を低くして会社に入りやすくする、私たちは働きやすい職場を作る。もう1つは1人でも多くの人に働くチャンスを広げられるよう、雇用機会を増やしたい。会社としてフルタイム社員が必要となれば、能力、

意欲を見て勤務変更しています。半数はすでにフルタイムで働いています」

職場大好き 仕事にやりがい

新土居さんは養護学校の高等部を卒業後、２００９年３月に入社した。「最初の修正作業は大変で、辛い作業でした。難しかったですが、徐々に覚えてきて、できるようになりました。次に５５０トンのプレスの成型をしました。暑いところの作業で、メチャ汗をかくし大変でした。その後、組立加工になり、カウンターの穴あけと梱包の作業をしています。

同期入社の谷山友哉さん（左）と斎藤泰順さん。
２人で協力し合って仕事を進める

数が多くなると大変です。これから大きいプレスの成型をやりたいです」

新土居さんは大変だ大変だというが、職場が大好きなのだ。「休日は１人で買い物に行って、服を買ったりします。ここで働き続けたいです」

養護学校高等部の同期で、それぞれ別の会社に就職したが、その後２０１０年12月にたまたま同社に一緒に入社した人が２人いる。組立加工の工程を立ち上げるとき、森安さんは障害者施設や作業所を回って募集し、応募した人たちを即採用した。その２人が斎藤泰順（たいじゅん）さんと谷山友哉さんで、洗い場の床面の排水口の穴あけ加工やプラスチック表面に親水剤の塗布をしている。

斎藤さんは働いていた印刷会社が倒産。福祉作業所にいて、ハローワークの紹介で就職した。「１年半たちました。初めに仕事のやり方や内容、ルーター加工や親水剤の加工を教えてもらいました。最初は難しかったけれど、いまは間違えないで頑張っています。ドライバードリルでビスを締める仕事をしたいです」。好きなことはたくさんあり、ＡＫＢ48、ＮＥＷＳ、ＴＯＫＩＯのファン。カラオケ、テレビや映画を見ることも大好きだ。

谷山さんは旅館で清掃の仕事をした後、ハローワークで１年間職業訓練を受け、障害者作業所にいた。

「入社して初めてドリルを持ちました。最初は怖くて手がビクビクして、できるかなと思いました。コツコツ練習して、上司から丁寧に教えていただいたら、スムーズにきれいに穴をあけられるようになってきました。自分でも上手になったと思います。もっともっとうまくなりたいです。とても楽しい職場です」

カラオケで演歌を歌うこと、食べることと寝ることが大好き。２人とも、「ここでずっと働きたい」と思っている。

森安さんは、障害のある人たちを雇用したことで作業改善も進んだと感じている。

「ちょっと難しいかなという仕事でも、彼らでも自然にできるようにと考えた結果が、業務の『改善』になっています。私たちが何年も気づかずにいて、障害のある人たちがわかりにくいという作業を改善すると、その結果、職場のみんながわかりやすく、楽に作業ができるようになることを経験してきました。障害者への先入観、『危ない』、『できない』というのは、私たちの作業環境整備や作業設計の問題であることも多いのだと、気づかされてきたように思います」

誰もが当たり前に働ける会社

今後の課題について、森安さんに聞い

た。

「我々の次の課題は、スキルをあげていく斎藤君、谷山君たちが活躍できる仕事を拡大していくことです。まだ外注に出ている仕事を取り込むとか、社内の仕事を観察し、仕事の組替えをして、できる仕事を増やしていくことを考えています。職域を広げることはすぐには難しいと思いますが、仕事の量はこれから自然に増えていくと思います」

トラブルは皆無ではないが、トラブルで困ったことはないという。

「障害者の世界のいいところは、支援の団体・機関があることです。何か問題があれば、強力な支援をしてくれます。問題があったときこそ、我々の活動は伸びると思っています。障害者なんかいないほうがうまくいくと思うかもしれません。でも、社会にはいろいろな人がいて、いろいろな役割がある。パズルのピースのように、みんなが合わさって一つの社会が成り立っているのです。多様性を排除する社会は、欠けた社会です。会社も同じだと、障害のある人たちから教えられました」

親水剤を塗布する斎藤さん

管理部長として、社員に「障害者雇用への理解を」と要求するつもりもない。

「私は、障害者だからとか、障害者を雇用しているとかいうことは意識していないんです。滝本部長も同じだと思います。毎日接していない部署では、まだ『障害者』と見ていると思いますが、それはごく自然なことです。頭の理解では人は変わらないと思います。直接ふれあうことで人は変わっていきます。また、地域でも知られていなかった私たちの会社にたくさんの見学者が来られるようになって、あらためて社員の認識が変わっていくということもあると思います」

森安さん自身、障害のある人たちと一緒に働くことで大きく変わった。

「出会いはとても大きかったですね。この5年間は、それまでと違う人生を歩んでいます。一番よかったと思うのは、『障害の本質』がわかるようになったことです。本当の障害とは、障害のある人たちを受け入れない社会のこと。それは私のことだったと気づきました。そういう『障害』のない職場にしていきたい。彼らの居場所がある社会にしていきたい。だれもが当たり前に働ける会社、だれもが当たり前に暮らせる社会。それが私の夢です」

初めはドリルなどの電動工具が怖かったという谷山さん。
いまは自信を持って作業している

オーダーメードの加工が必要なユニットバスの組立工程は、今後さらに社内での重要性が増すだろうという。森安さんが「私から見るとピカイチの職場」の存在感はこれから増していきそうだ。